

国際政治学

講義7 安全保障のジレンマ

早稲田大学
政治経済学術院
栗崎周平

1

戦争原因論:安全保障のジレンマ+スパイラル

安全保障のジレンマ (Security Dilemma)

- 現実主義の戦争発生の説明モデル (Herz 1950, Waltz 1959)
- 【主張】 無政府状態 ⇒① ⇒② ⇒③ ⇒④ ⇒戦争
 - ジック① 相互不信 (他国の意図など) 武力行使の正統性ゆえ
 - ジック② 恐怖 (先制攻撃の恐怖)
 - ジック③ 軍備増強の連鎖と恐怖のスパイラル
 - ジック④ 先制攻撃のインセンティブ

【ざっくりまとめ】他国による攻撃から安全を保障するために、パワーを増強。それを他国は脅威に感じ、安全保障のためにパワーを増強。結果的に緊張がより高まる。

2

「安全保障のジレンマ」の基本形

安全保障のジレンマ (Security Dilemma)

【もっとザックリとした説明】

このリンク先にあるPrezi プレゼンの26頁から34頁を参照
<https://prezi.com/j6fghbj8bsiw/2/>

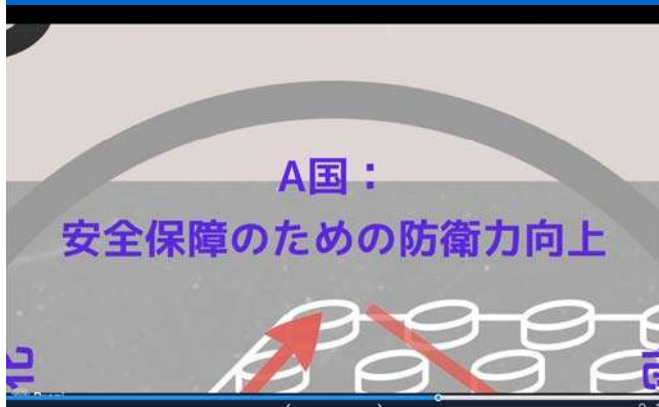
「国際関係論入門」の授業で

3

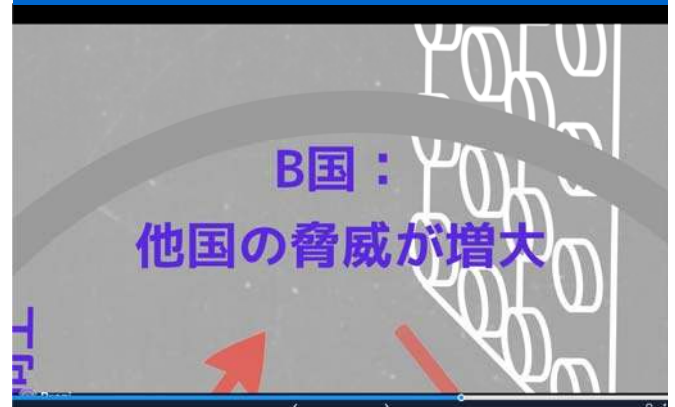
「安全保障のジレンマ」の基本形



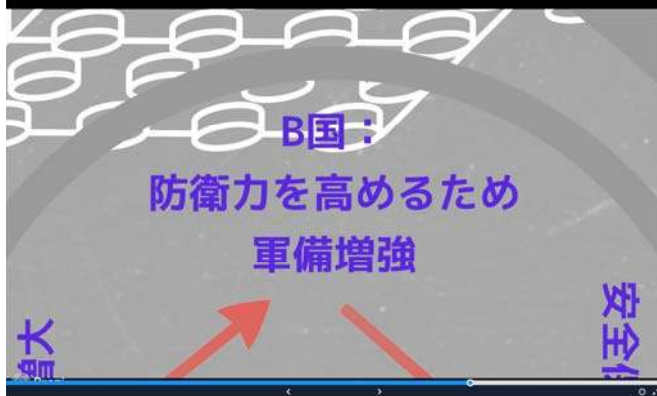
「安全保障のジレンマ」の基本形



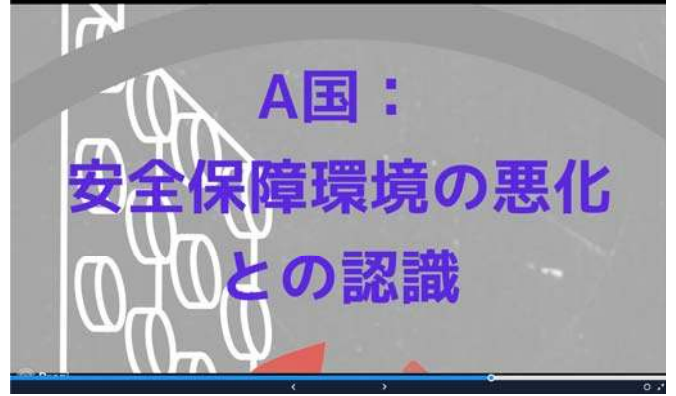
「安全保障のジレンマ」の基本形



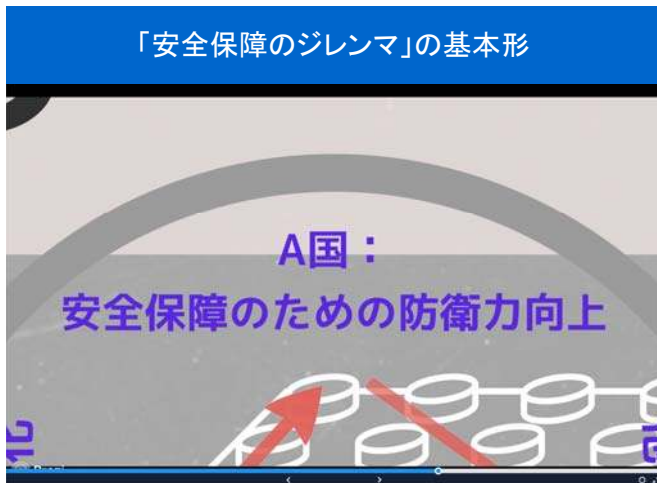
「安全保障のジレンマ」の基本形



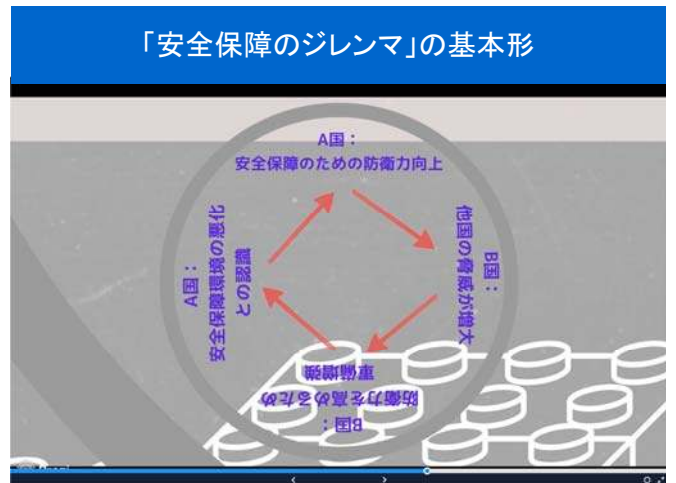
「安全保障のジレンマ」の基本形



「安全保障のジレンマ」の基本形



「安全保障のジレンマ」の基本形



戦争原因論: 安全保障のジレンマ+スパイラル

【環境】 自助システムとしての国際システム

- 各国は、自らの責任で自国の防衛を担う責任
- 各国は、防衛の手段を確保

【仕組み】 <脅威認識 ⇒ 軍備増強> の負のスパイラル

- 自国の安全保障の強化（防衛力向上）は、結果的にいずれの国の安全保障のレベルも逆に低下
- 相互不信・脅威認識に基づく恐怖がその原因

【帰結】 戦争の原因としての安全保障のジレンマ

- 相互の軍備増強競争のスパイラルが制御不能
- 先制攻撃への誘因 ⇒ 戦争の発生
- ⇒ 戦略的安定性の瓦解

11

戦争原因論: 安全保障のジレンマ+スパイラル

安全保障のジレンマの概念は古い！批判的に検証しよう

戦争原因論としての「安全保障のジレンマ」の解剖

ロジック① 相互不信（他国の意図など）

⇒「無政府状態」から含意

= 不完備情報
仮定としては
問題ない

含意1: 国際システムはコミットメント問題を生む

近代国際システム = 中央政府の不在（アナーキー）

⇒ 国家間合意の強制装置の欠如

⇒ 各国家が自発的に望まない限り、合意や規範の履行を強制することはできない

12

戦争原因論:安全保障のジレンマ+スパイラル

戦争原因論としての「安全保障のジレンマ」の解剖

ロジック② 恐怖 (先制攻撃の恐怖)

⇒「無政府状態」からの含意 この仮定も良い

含意2: 国際システム=自助(Self-help)システム

- ホブズ: 無政府状態は「自然状態」
 - 「万人の万人に対する闘争」
 - 共通の上位権威が存在しないため、秩序の維持を行う統治者が不在
 - 自らの安全保障を図る責任 ⇒ 自助システム

13

戦争原因論:安全保障のジレンマ+スパイラル

戦争原因論としての「安全保障のジレンマ」の解剖

ロジック③ 軍備増強の連鎖と恐怖のスパイラル

⇒ 相互不信や恐怖に対する反応としての軍備増強は、論理的には自明でなく、経験的にも必然でもないが、そういう主張になっている

含意3: 国際システムにおいて武力行使が常に可能

- 安全保障装置としての国家 (存在理由)
- 各国家は、各々の目的達成のため武力行使を行うことができる (暴力の独占と「暴力装置」としての国家)
- 暴力・軍事力は相対的

14

必ずしも軍備増強のみではない。
安心供与、信頼情勢、通報など

戦争原因論:安全保障のジレンマ+スパイラル

戦争原因論としての「安全保障のジレンマ」の解剖

ロジック④ 先制攻撃のインセンティブ

⇒ 相互不信や恐怖や軍拡競争から、なぜ先制攻撃への誘因が出てくるのか自明ではないが、そのような主張になっている

Kenneth Waltz, *Man, the State, and War*, (1959)

- 以来、アナキーが、戦争が繰り返し起こる根本的な原因として考えられてきた

“Under anarchy, nothing stops sovereign states from using force if they wish.”

各国が、自らの正義や国益を定義する権利を行使するインセンティブにはならない

相手が武力行使をすることを止めることはできないが、自分が武力行使をするインセンティブにはならない

安全保障のジレンマ:攻撃・防御バランス

戦争原因論としての「安全保障のジレンマ」の拡張

Quester (1977) や Jervis (1976)

攻撃・防御バランスと安全保障のジレンマ

- 兵器システムが防御ではなく攻撃偏重であるとき、安全保障のジレンマは悪化し、協調が困難
- 攻撃システム (先制攻撃兵器)
 - ⇒ 攻撃意図のない国に攻撃への誘因を付与
 - ⇒ 安全保障のジレンマ (つまり相互不信や恐怖心) を悪化

【問題】

兵器システムは、攻撃兵器であるのは防御兵器であるのか峻別困難 (e.g., 空母は攻撃目的、防御目的?)

16

安全保障のジレンマ:戦争原因論の問題

戦争原因論としての「安全保障のジレンマ」の拡張

土山実男

- 心理的負荷が、理性を失わせ、武力行使
- 相手が何時撃ってくるのか分からないから撃つ

⇒ 西部劇の見過ぎ

この説明はおかしい。エビデンスがない。心理的負荷のみでは因果関係メカニズムを捉え切れていない。

【問題(経験)】

- 当てはまる事例はごく少数: 2003年イラク戦争
- 先制攻撃で始まる戦争は歴史上ほぼ無いという実証

【問題(理論)】

- 心理的負荷という要因だけでは、先制攻撃を説明する因果メカニズムを書き切れていない

17

安全保障のジレンマ:戦争原因論の問題

けれども、結局、

戦争原因論としての「安全保障のジレンマ」は良く分からない

戦争原因論としては不足している。

ロジック④ 先制攻撃のインセンティブ

- これがなぜ戦争に繋がるのか分からない
- 先制攻撃が始まらないほとんどの戦争を説明できない
- そもそも独立変数は不変であるのに、従属変数は変化

⇒ これに変わりうる戦争の説明モデル

⇒ 第8回講義「戦争のパズル」以降の説明

18

安全保障のジレンマ

「安全保障のジレンマ」は結局、何なのか？

- 戦争の説明モデルとしては有効ではない。
⇒ 紛争のモデルとしては失敗
- 相互不信が相互協力を阻害するモデルとしては有効
⇒ 協力のモデルとして現在は扱われる

【近年の研究では】

Anarchy ⇒ $\left\{ \begin{array}{l} \text{コミットメント問題} \\ \text{相互不信} \end{array} \right\} \Rightarrow \text{協力関係の阻害}$

19

安全保障のジレンマ

安全保障のジレンマによる協力阻害の事例

米ソ間の冷戦

- 相互不信のスパイラルとしての米ソ対立と軍拡競争
- 冷戦期、欧州の兵器システムは攻撃偏重
- 相互不信の起源：一国の防衛政策が他国の不安と恐怖（脅威認識）を増幅

WWI前夜の英独

- 英独双方の建艦競争は、相手国には「敵対意図の証拠」として認識
- 軍備増強による勢力均衡への努力
⇒ 相手国の脅威認識・恐怖を増幅
⇒ 相手国による軍備増強による勢力均衡の努力
⇒ 自国の脅威認識

20

安全保障のジレンマ

安全保障のジレンマによる協力阻害の事例

WWII 後の 日中・日韓関係

- 日本に対する不信（軍事化の意図という危惧）が協調関係の成熟を阻害
- 不信の起源： WWII中の日本軍によるatrocitiesと戦後処理における（日中・日韓双方による安易な妥協による）ミスハンドリング
- 二国間対立の演出による各国国内での政治利益
- 兵器システムが防御偏重でも、強い不信により安全保障のジレンマは悪化

とくに2000年以降の 日米同盟・米中日関係 日米同盟は安全保障のジレンマを悪化させる

- 脅威(threats)の源泉としての日米同盟
⇒ 日米同盟の強化は安全保障のジレンマを悪化させる
- 安心供与(assurances)の源泉としての日米同盟
⇒ 日米同盟の双務化は安全保障のジレンマを悪化させる懸念
- 日米同盟という防御偏重の「兵器」でも安全保障のジレンマは悪化

21

安全保障のジレンマ

安全保障のジレンマによる協力阻害の事例

WWII 後の 日中・日韓関係

- 日本に対する不信（軍事化の意図という危惧）が協調関係の成熟を阻害
- 不信の起源： WWII中の日本軍によるatrocitiesと戦後処理における（日中・日韓双方による安易な妥協による）ミスハンドリング
- 二国間対立の演出による各国国内での政治利益 旗の下結集効果
- 兵器システムが防御偏重でも、強い不信により安全保障のジレンマは悪化

とくに2000年以降の 日米同盟・米中日関係

- 脅威(threats)の源泉としての日米同盟
⇒ 日米同盟の強化は安全保障のジレンマを悪化させる
- 安心供与(assurances)の源泉としての日米同盟
⇒ 日米同盟の双務化は安全保障のジレンマを悪化させる懸念
- 日米同盟という防御偏重の「兵器」でも安全保障のジレンマは悪化

22

「安全保障のジレンマ」モデル

協力モデルとしての安全保障のジレンマの定式化

		State B	
		協力	裏切り
State A	協力	r, r	$0, t + \beta$
	裏切り	$t + \alpha, 0$	$w + \alpha, w + \beta$

- 「安全保障のジレンマ」と「囚人のジレンマ」は別物
- 「ジレンマ」という言葉が共通
- 「2×2の協力問題」という設定も共通
 - 囚人のジレンマ： Collaboration問題
 - 安保のジレンマ： Coordinationか Collaboration問題、 α と β の値によってインセンティブ構造は変化

23

紛争モデルではなく協力モデルである。
 α と β の値に応じて均衡が変わる。

WWII直後は安全保障のジレンマの後半の軍拡は顕在化していなかった。協力への阻害はあったものの、軍拡はない。

2000年以降は軍拡競争の特徴を持っている。

日米同盟は中国にとって安全への脅威。

中国はアジアでの軍事拡大によって反応している。

日本は日米同盟を強化していく→安全保障のジレンマ。

日米同盟はもともと日本の軍事化を防ぎ、それをシグナルするための安心供与政策であったが、今は逆となってしまっている。

少なくとも理論的には日米同盟は安全保障を悪化させる。